

聖書:使徒の働き15章22~35節

説教:平安と一致の神

はじめに

いつものように、前回までのあらすじを振り返ります。パウロとバルナバが福音を語ると、ユダヤ人だけでなく異邦人も救われていきます。これを見たあるユダヤ人が、「異邦人も割礼を受けなければ救われない」と言いだしたことが事の発端でした。パウロは、「必要ない」と言って反対したのですが意見がまとまらない。そこで、この問題を使徒たちがいるエルサレム教会に考えてもらうことにします。エルサレム会議でも最初は意見が割れてまとまらないように見えたのですが、ペテロがかつて異邦人の救われるのを見た経験をとおして、神はユダヤ人も異邦人も差別なくただ信仰によって救ってくださるのだと語ります。続いて立った使徒のヤコブも、聖書のみことばも異邦人も信仰によって救われると書いてあり割礼は必要ない、ただ信仰者としてふさわしい生活を送るよう伝えればよいと意見を述べます。このことが全会一致で確認された。それが前回のあらすじです。

この結論をアンティオキア教会にもちかえって報告すると、混乱していた教会が落ち着きを取り戻し、喜びにあふれた。それが今日の内容です。あれほど対立してぎすぎすしていた教会が、なぜ和解できたのか。みなさんも人間関係で悩むことが多いでしょう。どうしたら和解できるのか。仲良くできるか。その秘訣を知りたいと思うかもしれません。今日の所から教えられてまいります。

1 上下関係があるのか？

1) エルサレム教会と地方の教会

そこでまず二つのことを考えてみます。一つは教会に上下関係があるのか。二つはユダヤ人と異邦人にやはり上下関係があるのか。

まず教会について考えましょう。世界で最初にキリスト教の教会が建てられた場所はエルサレムです。いっぽうパウロとバルナバが属しているアンティオキア教会は、場所的に言えばエルサレムから遠く離れ、時間的に言えばエルサレム教会のずっと後からできた教会ということになります。

以前、ある方から「この教会の総本山はどこにあるのですか」と聞かれたことがあります。たとえば浄土真宗であれば京都の西本願寺、カトリックならばバチカンが総本山ということになる。その方も、おそらくそんな発想で私に尋ねてこられた

のでしょうか。みなさんはどう答えるでしょうか。一つの可能性はこうです。アンティオキア教会は分からないことがあればエルサレム教会に聞きに行っている。これは、エルサレム教会が総本山ということではないのか。いっけんするとそのように見えます。このことはまた後で考えます。

2) ユダヤ人と異邦人

次に二つ目の上下関係。ユダヤ人とユダヤ人以外の異邦人、そこに上下関係のようなものがあるのかないのか。ユダヤ人は割礼を受けている。異邦人も救われたいと思うならユダヤ人の習慣に従って割礼を受けるべきである。ユダヤ人の格が上で、異邦人は格下である。そんな発想です。でも、エルサレム会議は異邦人は割礼を受けなくてよい。ユダヤ人も異邦人もなんの差別もない。そういう結論を出した。教会は、人種や民族、文化、言語の違いはないというのです。世界は人種差別は問題だと言いながら、なお克服できないままです。そこに人間の闇があるのです。教会はそういう意味で光となります。ユダヤ人と異邦人には上下関係はありません。このことはまた後で詳しく取り上げます。

2 エルサレム教会

1) 「決めました」→「最もよいと思います」

そこで、教会と教会の間では上下の格差があるかないかに戻ります。エルサレム教会は、全世界に散らばるプロテスタント教会の総本山なのか、そうでないのか。そのことです。

その答えは、エルサレム教会が、どのような信仰に立ってアンティオキア教会に書き送ったか、そこを見て

くと、だんだんわかってきます。二つあります。一つ目は28節です。「聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。」

ここの「決めました」に注目します。同じ言葉が、ここだけでなく22節にも「パウロとバルナバと一緒にアンティオキアに送ることに決めた」とあるし、25節にも「あなたがたのところへ送ることを、全会一致で決めました」と、「決めました」が何度も出てきます。

エルサレム教会が決めた。やっぱり、格下の地方教会は、総本山であるエルサレム教会の指導に従う、そういう上下関係があるのだ。これを見たらだれもがそう思うでしょう。ところがそう単純な話ではない。私たちは「決める」ということばを聞いてどんなイメージを持つでしょうか。真っ先に思いつくのは、たとえば裁判長が判決を下すというイメージでしょう。しかしもともとの言葉にはそういうイメージはなくて、英語訳の方がよく表していると思います。「私たちは、こうするのが最もよいと考えました。」そんな意味です。裁判で白黒はつきり決めて、それに従いなさい、というのではない。エルサレム教会は、慎重に言葉を選んで手紙を書いています。とても配慮が行き届いている。自分たちは指導的立場にあるという態度ではありません。その反対に、へりくだって謙遜な態度です。同じ立場に立ちながら、困っている教会を励ましていく。そういう姿勢で一貫しています。

2) 「異邦人の兄弟たち」→「異邦人出身の兄弟たち」

エルサレム教会の信仰がよくわかるもう一つの箇所が23節です。「兄弟である使徒たちと長老たちは、アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつを送ります。」ここの「異邦人の兄弟たち」という表現です。ここは、もともとのことばに忠実に訳すと「異邦人出身の兄弟たち」となる。

この教会には日本人で日本語を母国語とする人たちもいれば、イギリス人で英語を母国語とする人もいます。習慣として、私は日本人クリスチャンとか、あなたはイギリス人クリスチャンと言ったりします。ところが聖書的に言えば、これはあまり正確ではない。正しくはこうなる。「私はもと日本人でしたが、いまは主にある兄弟です。」「私はもと英国人でしたが、いまは主にある兄弟です。」外見や文化、母国語は違うけれど、教会においては、全員が神の国に国籍がある国民で、兄弟姉妹という身分にある。ユダヤ人だから異邦人よりも偉いということはない。そういうところにも配慮しながら手紙を書いている。すばらしい手紙です。

3) 使徒職 (ルカ24章)

いま、教会の違いも民族の違いもない、そういう信仰でエルサレム教会は手紙を書いたと言いました。でも疑問が残ります。手紙では、アンティオキア教会は「こうしてください」と書いているの

で、やっぱりエルサレム教会が指導的な立場にあるということではないか。このことをどう考えたらよいのか。

この問題は使徒という働きと関わっています。よみがえられたイエスは、天に上げられる前、使徒たちに対してこう語ります。ルカの福音書24章46～48節。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して、あなたがたは、これらのことの証人となります。』」

教会と教会の間に上とか下という格差はありません。それが基本原則です。しかし、イエス・キリストの十字架の死とよみがえりを目撃し、使徒に選ばれた弟子たちは、やはり特別な立場にありました。「これらのことの証人となる」とも言われたのですから、率先して模範を示すことになる。エルサレム教会が、「私たちはこうするのが一番良いと思います」と書いて送ったのは、使徒としての使命を自覚してのことです。

そうしますと、「この教会の総本山はどこにありますか」、この答えはどうなるか。使徒たちが活躍していた間は、エルサレム教会が「総本山」の役割を果たしていたといえるでしょう。しかし今は使徒職にある者はいません。ですから総本山はない。すべての教会が主の前にすべて平等ということになります。

3 平安と一致

1) 聖霊の働き

アンティオキア教会は、以前は真っ二つに分かれてギスギスした雰囲気、一致するのは難しいと思われていたのに、いまは平安と一致に導かれました。手紙を読んで喜びました。どうしてそんなことができたのか。二つあります。一つは、いま見てきたように使徒たちの信仰がポイントです。イエス・キリストの死とよみがえりを伝える使徒として、そして同時に主の前に罪赦された一人の罪人として、謙遜な姿で書きました。

そして二つ目。28節にこうあります。「聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。』」

この手紙を書き送ったのは、聖霊と私たちだと言っています。実際に聖霊が働いておられるのを体験したからです。そもそもエルサレム会議はどういう所から始まったか。「異邦人にも割礼を受けさ

せるべきである」、反対意見もと成意見がぶつ
かって、とてもまとまるとは思えなかった。そこから
始まった。ところが終わってみるとどうなった
か。多数決を取って51対49の僅差でぎりぎり決
まったのではない。全員一致です。普通ならありえ
ないことでしょう。「クリスチャンは仲良くしな
ければ」ということで、言うべき事があるのに
黙ったからではない。皆、言うべきことを信仰を
もって言った結果です。これが聖霊の働きです。聖
霊が働かれるとき、平安と一致が与えられていく。
それが教会です。

2) 仕える者となる

教会だけではありません。人と人との交わり
においても同じです。あの人とギスギスしてしまっ
ている。隙間風が吹いている。意見がぶつかってし
まって、気まずい思いがある。そういうとき、ど
うしたらいいのかとだれもが悩みます。でも基本は
そんなに難しくない。実行するのが難しいと感じ
られるだけかもしれない。

だれが一番偉いのかと言い合っていた弟子たち
にイエスは何と教えたか。「だれでも先頭に立ち
たいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者
になりなさい。」基本はこれです。使徒たちはこれ
を思い出しながら手紙を書いてアンティオキア教
会を励ました。確かにへりくだることは簡単では
ありません。でも、もしへりくだることができた
なら聖霊が働きます。聖霊が働くとき、悲しんで
いる者が励まされます。和解と一致が与えられま
す。なによりも喜びが与えられる。

誰が私たちの模範でしょう。十字架というこの
世で最もへりくだりの姿を示しながらこの恵みを
教えてくださった主です。この方を信じてまた歩
んでまいります。